

箱根駅伝に関する新聞報道の研究

A study of Newspaper Articles Concerning Hakone Ekiden

1K04A230-1

溝口 琢朗

指導教員 主査 リー・トンプソン先生

副査 宮内孝知先生

目的

箱根駅伝といえば、日本の正月の風物詩である。箱根駅伝は日本の新春に毎年さわやかな感動を運ぶ。初めて開催された 1920 年から現在に至るまで主催、共催、または後援という形でこの駅伝を支え続けてきたのは新聞社である。第一回大会から戦争により大会が中断されるまでを支えたのが報知新聞であり、戦後、大会を復活させ現在に至るまで関わり続けているのが読売新聞である。

両新聞社はまた 80 数年に渡って箱根駅伝を報道してきた。この一世紀弱という長い年月の中で、箱根駅伝に関する報道はどのように変化してきたのだろうか。時代や社会情勢などに影響され、内容や紙面が変わっているのだろうか。報知新聞、読売新聞の箱根駅伝に関する記事の量的分析及び内容分析を通して、新聞報道の経時的変化を明らかにしたいと考えている。

方法

戦前は一般紙として発行されていた報知新聞を取り上げ、戦後は読売新聞を取り上げた。それぞれ朝刊のスポーツ欄を対象とし、5 大会ごとに量的分析及び内容分析を行った。

量的分析はそれぞれの掲載日数、写真数、記事の中で写真が占める割合をカウント、計算した。また記事中の含まれるいくつかの要素(タイムに関する記述、順位に関する記述など)をピックアップし、それらが記事中に何度出現するかを数え、経時的にどのように変化しているのかを明らかにした。

内容分析はまず見出しを調べた。時代や社会情勢によって何か変化があるのかを明らかにした。また、全ての年に含まれるわけではないが、多くの場合その年に活躍した選手を一人取り上げ、特集が組まれている場合が多くあった。このような記事を「ヒーロー記事」と定義し、そのような記事に取り上げられる選手の基準にも経時的に見て変化があるのかどうかということも明らかにした。

結果

右図は量的分析によって得られた結果の一部をグラフにしたものである。上図は分析項目の年ごとの総出現回数を記事が掲載された日数で割った値を平均化しグラフにしたものである。下図はそれぞれの年で写真が 1 日どれくらいの割合で含まれるかを計算し

た値をグラフにしたものである。これらの量的分析結果から時代によってどのような要素がそれぞれ多く含まれていたかが明らかになった。また見出し、及びヒーロー記事の内容分析によって新聞記事のそれぞれの時代における特徴、また内容の経時的変化を明らかにすることができた。

考察

今回の分析を通して、箱根駅伝に関する記事はその時代や社会情勢に想像以上に大きく影響されていることがわかった。特に記事の見出しはその時代の世相をよく表しており、非常に興味深いものがあった。例えば、根性論や練習量の豊富さが評価されていた時代にはそのような見出しが多数あったし、最近の世相でいえば、個性を尊重するという姿勢があらわれている場合もあった。まだ意外だったことは、テレビ放送という新聞と比較して新しいメディアが、新聞報道に与えた影響が想像以上に大きかったということである。明らかに写真の割合が増加したり、項目の出現頻度が激変したり、予想外の変化が数多く見られた。今回の研究をきっかけに新たな分析、研究に発展していければ幸いである。

